
月の女神と純潔の杖

菜ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の女神と純潔の杖

【Nコード】

N0285V

【作者名】

菜ノ花

【あらすじ】

園井ありすは11歳の誕生日、大切なものを失った。絶望するありすの前に現れたのは、ホグワーツ魔法魔術学校の校長、アルバス・ダンブルドアだった。ダンブルドアに連れられ、ありすはホグワーツのあるイギリスへ。ありすはホグワーツでいるいるな人々と出会い、絆を紡いでいく。しかしありすには自分でも知らない大いなる秘密があった…。

大好きなハリーポッターです！ 親世代です。

他の作品も連載しているので更新はきまぐれですが、よろしくお願
いします！

第1章 夜の花畑 運命を変える出会い（前書き）

大好きなハリーポッターの連載です！

親世代設定なのでかなりキャラ作りますが、大丈夫な方はぜひ読んでください。

今回はハリーポッターの登場人物はダンブルドアしか出てきませんが。

主人公の身の上話的な感じですよ。

第1章 夜の花畑 運命を変える出会い

私は、いらない子だから。

それが今年小学5年生になった園井ありすの口ぐせだった。

ありすは両親がもの心ついたときからいなかった。

ありすをずっと育ててくれていた孤児院「ひるがお園」の先生は「ありすちゃんのお母さんは事故で亡くなったんだよ」と、ありすが聞くたびに答える。

両親の顔は覚えていないけれど、優しくて大好きな先生がいてくれたから平気だった。

ひるがお園の子ども達には馴染めなかったが、あまり気にしなかった。

ひるがお園は、優しくてあたたかい場所なのだ。

だけど、学校もそうにはいかなかった。

「お前家族がないんだろ！ 人間じゃねーんだ、妖怪！」
今日もまた言われた。

ありすは学校に、ひとりも友達がない。

生まれながらに持つ透き通るような銀色の目のせいで、ずっと仲間はずれにされてしまう。

小さいころからひとりですぎたせいで、「友情」や「仲間」をありすは知らない。

笑うことはあまりなかった。

ぼんやりした気持ちを抱えながら、今日も学校に行く。

「ありすちゃん、今日はあなたのお誕生日だから早く帰ってきてね
そうか、今日は自分の誕生日だったのか。

カレンダーを見る。

7月7日の七夕が、ありすの誕生日だった。

先生に言われるまですっかり忘れていた。

「うん。行ってきます」

「行ってらっしゃい」

先生の笑顔と言葉に、ちょっとだけ気持ちが軽くなった。

「いただきまーす！」

ああ、また嫌な時間があった。

ありすは学校にいる間の中でも、特に給食の時間が苦手だった。

給食の時間は、好きな友達と一緒に食べられる。

ありすはひとりも学校に友達がいなかったから、いつもひとりで食べるのだ。

「やーい、お前またひとりで給食食べたな。まっ、そーだよな。」

お前のことなんか好きなヤツ誰もいないもんなー」

クラスで一番ありすに意地悪してくる男の子が、わざとみんなに聞こえるように大きな声で言う。

周りのみんなも笑う。

先生も、奇抜な瞳の色を持ち暗いありすを気味悪がっていたから、何にも言わない。

「……………」

学校に比べてまだ良好だったひるがお園の子ども達も、一緒になつてありすをいじめるようになった。

それを先生は知らなかったが、ありすはそのほうがいいと思っていた。

けれど、今日という今日はもう限界だった。

「そうだね。だって私、いらぬ子だから」

そうやっこの思いで言うと、ランドセルを持って教室から飛び出した。

男の子も、周りのみんなも殴られたように呆然としていたのが、視界の端にチラッと見えた。

嫌い!!!

学校もそこにいるみんなも、ひるがお園の人たちも嫌い!!!

帰路の途中にある小さな公園で、時間を潰す。

「先生…心配するかな」

学校を飛び出してしまったことより、先生の悲しそうな顔をさせてしまうことのほうが、ずっと後悔していた。

やがて、夕暮れの時刻になって、空が真っ赤に染まった。

「そろそろ帰らなきゃ」

そう自分自身に言い聞かせ、歩き出した。

あとひとつ角を曲がればひるがお園というところで、妙に赤い光と焦げ臭いにおいに気が付いた。

そして、人々と消防車がひるがお園のほうへ向かっていることが思い当たったときには、もう走り出していた。

「!!!」

角を曲がったありすの目に映ったのは、空のように真っ赤な炎をあげて燃える、大好きなひるがお園の姿だった。

「そんな…!!」

変わり果てていくひるがお園を目にしたありすは、そこから一步も動けなくなってしまった。

「消防車が来たぞ!!」

「救急車はまだなのかしら?」

「あと数分だそうだ。だが中にいる人たちは全員絶望的らしい!」

絶望的

。

その言葉の意味を、まだ幼いありすは知っていた。

『今日はあなたのお誕生日だから早く帰ってきてね』

今朝の、先生のあたたかい言葉と表情を思い出した。

もう誕生日なんて、どうでも良かった。

「先生、ごめんなさい……」

大好きな、家が、家族が、音をたてて壊れていく

ありすはふらふらとおぼつかない足取りでその場を去った。

どのくらい歩いたのだろう。

もう夜になり、あたりは真っ暗で月明かりしかありすの足元を明るくするものはない。

もう、このまま死んでしまいたい。

そうしたら、先生に会える。

そう思ったら、急に目の前の道が開けた。

そこは、どこまでも続く色とりどりの花畑だった。

「わあ…！」

暗闇の中で白くかすんで、華やかで綺麗だった。

「先生にも見せてあげたいな。」

そう言葉に出した瞬間、またどつと絶望が押し寄せてくる。

ありすは花畑の真ん中まで歩いて行って、そのまま仰向けに倒れた。

花びらが周りに飛び散る。

だんだんまぶたが重くなってきて、そのまま目を閉じようとした。

「お嬢さん、死んではダメじゃよ」

真上から、凜とした声が聞こえた。

ハッと目を開けると、そこには変な帽子をかぶった、長い髪の毛も豊かなひげも真っ白なニコニコした老人が立っていた。

ありすは驚いて起き上がった。

「お……おじいさん誰!？」

「おお、わしか？ わしはホグワーツ魔法魔術学校の校長、アルバス・ダンブルドアじゃよ」

魔法魔術学校……？ ありすは話についていけない。

それよりも、このおじいさんが自分の気持ちを見抜いたことのほう

が不思議だった。

「だって、もう私生きていくのが辛い…。お母さんとお父さんがいなくて、好きだった先生も死んじゃって、みんなから仲間はずれにされて…」

話しているうちに涙があとからあとからあふれ、止まらなくなってしまう。

おじいさんはありすの話を、うんうんと頷きながら聞いてくれた。

「そうか…辛かったのう。でも死んではダメじゃ。もし君が天国に来てくれても、先生は喜ぶじやろうか？」

そうかもしれない。

先生が、私が死ぬことを望んでいるなんて、絶対にない。

「でも私…これから先ずっとひとりぼっちなんて嫌よ。」

ありすが鼻をすすって言うと、おじいさんは今まででいちばん優しく微笑んだ。

「なら、わしと一緒に来ればいいじゃろう」

「…え？」

「わしと一緒に、ホグワーツに行こう。あそこなら、君を仲間はずれにしたりしない、いい仲間がたくさん出来るよ」

ありすは、ずっと人間不信だった。

幼稚園の先生にもなつけなかった。

だけど、このおじいさんの言葉には、信じれる
信じたい
と思う何かがあった。

差し出されたおじいさんの手を、ありすは泣き笑いのような顔になりながら、そっと握った。

先生…わたし、もうちょっと頑張ってみる。

次の瞬間、
ありすたちは夜の花畑から
跡形もなく消えていた。

第1章 夜の花畑 運命を変える出会い（後書き）

ありがとうございました！

これから頑張って連載していきたいと思うのでよろしくお願いします。

第2章 ダイアゴン横町で 桜の木

ありすがふと目を開けると、そこは知らない場所だった。

古びているが、とても綺麗に手入れがしてある家具が並び、清潔なおいがする。

起き上がると、ベットの脇にある窓から朝日が差し込んでいた。

「おはよう。目が覚めたかね？」

声のした方に目をやると、そこには昨日夜の花畑で出会ったおじいさん　　アルバス・ダンブルドアが朝食のコーヒーを飲みながらゆったりと椅子に腰かけていた。

あれは…夢じゃなかったのだ。

ひるがお園が燃えて、みんなが死んで、不思議なおじいさんに出会って「ホグワーツ」という場所に行くことをきめたこと、全部。

「おはよう…:…:ごぞいます。ここはどこですか？」

「『漏れ鍋』じゃよ。イギリスのロンドンじゃ。昨日の夜から何も食べていないから、お腹がすいたじゃろう。君も朝食を取るといい」

ロンドン！

しかしこの人の名前もカタカナのような名前で、これから行く学校というところもそうなのだから、イギリスであってもおかしくはないだろう。

だが、ありすは英語が出来ない。

それより、ダンブルドアに言われて初めて自分が空腹を感じていることに気が付いた。

「あ、じゃあ…いただきます」

ありすがそう言つと、ダンブルドアがおもむろに細長い杖を取りだして1度振った。

すると、あるうことが何も無いところからコーヒーとパンとサラダのセットが出てきたのだ！

「え！？」

ありすは目を「しし」とこすった。まだ夢を見ているのかもしれない。

「おやおや。まあでも信じられないかのう。これが『魔法』じゃ」

小さい頃、先生に読んでもらった絵本に、魔法を自由自在にあやつれる「魔法使い」という人が出てきた。

その「魔法使い」はなんでも貧しい人の願い事を叶えてくれるのだ。

「先生、は…魔法使いなんですか？」

驚いて言葉をつつかえさせながら聞くありすに、ダンブルドアはにっこりと笑った。

「そうじゃ。わしは魔法使いじゃよ。そして君も魔法使い…いや、君の場合は魔女のほうが正解かな」

ダンブルドアの言った言葉を、理解するのに数秒かった。

「私が、魔女？」

「そうじゃよ。おお、そういえばこれを渡してなかったのう」

そう言ってダンブルドアは懐から黄色味がかかった封筒を取り出した。

「それを開けてごらん」

封筒をひっくり返すとエメラルド色で宛名が書いてあった。

だが、英語の筆記体で書かれていて、ありすにはさっぱり読めなかった。

「あの、先生…私まだ英語読めません」

「おお、そうじゃったのう。では…」

ダンブルドアは何やら小難しい呪文を唱えた。

すると、英語が…読める！ 何もしないでもスラスラと読めるのだ！

『漏れ鍋 特等室 アリス・ソノイ様』

綺麗な字でそう書かれていた。

アリスがここにいることがなぜ分かったのだろう。

しかし、「魔法」になぜは禁物だろう。

アリスは中から手紙を取り出し、読み始めた。

『ホグワーツ魔法魔術学校 校長アルバス・ダンブルドア
親愛なるソノイ殿

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。
教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は9月1日に始まります。 敬具

副校長ミネルバ・マクゴナガル』

中からもう一枚紙がひらひらと落ちてきた。

それには教科書やら授業に必要なものやらたくさんリストが並んでいた。

これを見るのは後にしよう。

「読み終わったかね。それじゃ、早速行くとしようか」

「どこにですか？」

ダンブルドアはまたもやにっこりと笑った。

「ダイアゴン横町へじゃ」

ダンプルドアはまたもや杖の一振りで朝食の後片付けを済まし、部屋を出てミシミシという階段を降りた。

下の階は、少し薄汚れていた。

そこにはカウンターにバーテンしかいない。

「トム、少しダイアゴン横町へ行ってくるよ」

ダンプルドアの声にバーテンが顔をあげ、にっこりとお辞儀する。

「はい、いつてらっしゃいませ。お嬢さんも、お気をつけて」

礼儀正しいバーテンに見送られ、アリスたちは外へ出た。

しかしそこは壁に囲まれた小さな庭で、出口のようなものは一切見当たらない。

「さてと…わしもここへ来るのは久しぶりじゃから忘れてるかもしれん…」

ダンプルドアはブツブツ言いながらレンガのひとつを杖で3回叩い

た。

「アリス、下がっていなさい」

ダンブルドアがそう言うのと同時に叩いたレンガが奥に消え、その小さな穴が徐々に広がり、一瞬にして大きなアーチ形の入口が出来た。

その向こうにはずっと遠くまで石畳の道が続いている。

「ようこそ、ダイアゴン横町へ」

「わあ…！」

入口をくぐると、レンガはスルスルと元の位置に戻ってしまった。

「さあ、まずはお金を降ろさなければ」

ダンブルドアが向かった先は、ひときわ大きくそびえる真っ白な建物だった。

「グリーンゴッツ　銀行じゃよ。ここからは何者でさえ盗むことはできんわい」

中に入っていくと、アリスより頭ひとつ小さい生き物が受付をして

いたり、そこらをちよるちよると走り回っていたりしている。

「先生、あれは…何ですか？」

「おお、あれは小鬼じゃよ。ゴブリン^{小鬼}」

「小、鬼…!？」

またもや驚愕するアリスだったが、ダンブルドアはそんなアリスを引っ張って受付まで行った。

何やら小鬼とこそ話していたが、話し終わった時にはダンブルドアは重そうな巾着袋を持っていた。

「先生…私今思いついたんですけど、私お金持っていないせん」

「そのことじゃがな、それはホグワーツで負担するから心配は無用じゃ」

「え、でもそんなの困ります!」

「大丈夫じゃ、なにしろ君はホグワーツ2度目の日本人留学生なのじゃから」

日本人で2度目の留学生？

詳しいことは良く分からなかったが、あまりの特別待遇に、アリスは申し訳ない気持ちだった。

本屋「フローリシユ・アンド・ブロッツ書店」で必要な教科書を買
い、「マダムマルキンの洋装店」でホグワーツの制服、他にもも
もるものを買った。

「そういえばアリスは昨日が誕生日だったのう。ふくろうは好きか
ね？」

アリスは目をパチクリさせた。

「イーロップふくろう百貨店」に入ると、数え切れないくらいのだ
くさんのふくろうたちが天井すれすれを飛び交っていた。

「ふくろうなんて見たの初めて…」

ふくろうといたら夜のイメージだ。それに夜にだって見たことは
1度もない。

数多のふくろうにクリクリした目で見られ、つつかれ、結局選んだ
のは夜空のような真っ黒なふくろうだった。

「ありがとうございます。すごく嬉しいです…」

孤児院で育ったアリスにとって、プレゼントを買ってもらったことな
どほとんど無に等しかった。

「礼には及ばんよ。さあ、最後はいよいよ杖じゃのう」

オリバンダーの店は、ぼんやりと薄暗い。

ダンブルドアは、外で待っていると云ったのでアリスひとりで店に入った。

「こんにちは…もうそろそろ会えると思ってましたよ、ソノイさん」

オリバンダーの目は灰色で、なんとなく自分の目に似ているような気がした。

「こんにちは…」

自分の名前を知っていることについては、もう何も聞かなかった。

「あなたの杖はもうご用意してありますよ」

そう言ってオリバンダーはひとつの高級そうな箱を持ってきた。

箱の中には、ダンブルドアが持っていたのと同じような杖が1本入っている。

「『^{サクラ}桜』の木にユニコーンの毛…どうぞ、お手に取ってみて下さい」
言われるままに杖を取り、杖を軽く振った。

すると、杖の先から銀色の淡い光の玉がクルクルと出てきてはじけ飛んだ。

オリバンダーは分かっていたかのように頷く。

「20年ほど前…あなたと同じように日本からひとりホグワーツの新1年生としてこの店にやってきた。それは昨日のように覚えていきます。あの子の杖も桜の木じゃった…」

アリスは親近感がわいた。

もしかしたら、その子もたったひとりで見知らぬこの地に来たのかもしれない。

「桜は、日本の国花だと聞いています…日本人であるあなたにとつては、何か不思議な力があるのかもかもしれませんのう…」

アリスはオリバンダーに見送られて外に出た。

ダンブルドアが待っていた。

「いい杖が買えたかね？」

「はい…」

「それでは帰るとしよう。まだ新学期まで2カ月近くあるから、その間は漏れ鍋に泊っていなさい。トムがいろいろと面倒を見てくれることじやろう。9月1日にキングズ・クロス駅の9と4分の3番線から11時に出る汽車に乗りなさい。では、新学期に会おう。」

9と4分の3番線なんて、あるんですか

？

そう質問しようと口を開く前に、ダンブルドアはその場から消えていた。

第2章 ダイアゴン横町で 桜の木（後書き）

まだダブルドアしか出てきません…。

次回には親世代の誰かさんが出てくると思いますので！

第3章 2人の少女（前書き）

今回はちよいと短めです。

でも2人の少女の気持ちを感じて頂けたらと思います。

では、どうぞ

第3章 2人の少女

ダンブルドアに言われた通り、アリスは毎日を漏れ鍋で過ごした。

あまりにも暇だったので、教科書を読むことで時間を潰した。

アリスは特に、天文学の教科書が好きだった。

星は、何か自分に近いものがあるような気がするのだ。

11歳の誕生日プレゼントに買ってもらい「オリオン」と名付けた漆黒のフクロウは、とても可愛らしく孤独感を感じていたアリスの心をあたためてくれる。

8月に入ると1週間に一度、ダイアゴン横町に出かけてもいいことになった。

新学期が1週間前に迫ったその日も、ダイアゴン横町に来ていた。

『フローリシユ・アンド・ブロッツ書店』で天文学の本を眺めていると、本棚の向こう側に肩まで流れるたっぷりとした濃い赤毛の女の子が右往左往していた。

どうやらアリスと同じ新入生らしい。

アーモンド形の綺麗な緑色の目をしていた。

自分とは違う優しそうな目の少女が、とてもうらやましくなって、気が付いたら声をかけていた。

「何か本を探しているの？」

赤毛の少女が振り返った。

「ええ、ホグワーツの教科書を買いに来たのだけけど……」

「それならこっちよ」

アリスは赤毛の少女を連れて本棚の間をスルスルと動きまわった

アリスはもうこの本屋の本の位置は大体把握していた。

本を全て買って外に出ると、赤毛の少女はほっとしたように声をか

けてきた。

「ありがとう、おかげで助かったわ。私はリリー・エンバス。あなたは？」

確かりりーとは、英語で百合の花の意だ。

百合の花がぴったりとイメージに合う、綺麗で純真そうな少女だった。

「私は園井 いや、アリス・ソノイよ」

「可愛い名前ね。アリスって呼んでいいかしら？ 私もリリーって呼んで」

「うん。よろしくね、リリー」

2人の少女が仲良くなるのに時間はかからなかった。

リリーもやはり新生だった。

「私、両親とも魔法使いじゃないから、手紙が来た時とてもびっくりしたわ…。両親は外で待っているの」

「そうなんだ…私もそうだよ。私、日本人でひとりでこっちに来たの。『漏れ鍋』に泊っているのよ」

「そうなの！ 東洋の人だとは思ってたけど…綺麗な黒髪ね。じゃあ夏までお父さんやお母さんと会えなくて寂しいわね」

本当は、もうずっと会えないのだけれど

なんとなく、言えなかった。

「うん、そうだね」

「それに、あなたの目。すごく綺麗な銀色なのね」

自分の目に触れられて、体が硬直した。

だが、それ以上に「綺麗」という言葉が胸に響いた。

誰でも、アリスの目を好奇の目で見てきた。

でもこの少女はうんと優しい表情で、笑ってくれた。

それが嬉しくて嬉しくて

気持ちが進み上げてきた。

「え、どうしたの、アリス？」

涙がにじんだアリスを見てリリーが驚きの声をあげる。

しかしアリスは、そんなリリーにっこりと微笑んだ。

「うっん、ありがとう。リリー」

その後は、杖はいちばん最初に買ったらしく、杖以外のリリーのものを買うのにつき合った。

「今日は本当に楽しかったわ。また9月1日に会いましょうね」

「うん」

アリスはまだ、人が信じられない。

けれど、初めてアリスの目を「綺麗」と言ってくれたこの少女は、今まで出会ってきた人とは違う。

正直、またこの美しい少女と会えるのか自信がなかった。

けれど、再会できることを信じて。

「またね、リリー」

「何か本を探してるの？」

その声をかけてくれた少女は、驚くほどに澄んだ銀色の目をしていました。

アリス・ソノイ。

聞けば日本出身だそうだ。

確かに東洋人らしい小柄な体型をしているし、背中まで届く綺麗な黒髪も何よりの証拠だ。

けれど、銀色の目は初めて見た。

そのことを率直に褒めた時、アリスの目に涙が浮かんだ。

そのことにリリーは慌てふためいたが、アリスは笑ってくれた。

「うづん、ありがとう。リリー」

本当に嬉しそうに、そう言って。

もしかしたら、その特別な目のせいで嫌な思いをしてきたのかもしれない。

こちらでも珍しいくらいの銀色の目だ。

色素の高い向こうでは、もっと稀なはずだ。

リリーは、今日初めて会ったこの小柄な少女が、好きだった。

同じホグワーツの新生入生と言っていたし、きっと汽車でもう1度会

えるだろう。

その時までもう少し。

「またね、アリス」

第3章 2人の少女（後書き）

明日、ついに映画「ハリーポッターと死の秘宝 part 2」を見に行きます！！

とっても楽しみです。

なんだか1作目の時のハリー達を知っているので、親のような気分になりますね。

ハンカチを持っていかねば！

第4章 運命の出会い アリス編

ついにその日
9月1日の新学期当日が、黄金色の日
差しと共にやってきた。

日本にいた時には考えられないくらい大きい荷物を抱え、ロンドンのキングズ・クロス駅へ足を踏み入れる。

オリオンを連れたアリスは当然目立つ。
けれど、アリスは見られるのは慣れていた。それは、悲しいことなの
のだけれど。

ダンブルドアに指示されたのは9と4分の3番線。

ダンブルドアと過ごした2日間間に、魔法とはアリスの知っている「常識」とはかけ離れていることに気づいていた。

なので、9番線と10番線の間壁の前で立ちつくしている。

「うーん…」

11時から出る汽車とダンブルドアは言っていた。

余裕を持って出てきたのでまだ11時30分前だったが、このままでは汽車に乗り遅れても不思議ではない。

どうしようとうんうん唸っていると、後ろから頭にゴツンと衝撃が

来た。

「!?!」

涙目になって振り向くと、アリスと背のあまり変わらない綺麗な黒髪と灰色の目を持った男の子がこっちを睨むように見ていた。

「お前何やってんだ、早くどけ」

「なっ…」

何も言い返せないうちに男の子はスッと目をそらしアリスの横を通り過ぎた。

振り返ると、男の子は
つてしまった!!

壁の中に吸い込まれてい

「き、消えた…?」

一瞬フリーズしたが、ハッと我に返り時計を確認するともう15分前になっていた。

「もう四の五の言ってる場合じゃない!」

アリスは意を決して壁へ駆けだした。

レンガの壁が目の前に迫り、反射的に目をつむる。

しかし、いつまで経っても堅い壁はやってこない。

人がざわざわうごめく様子を感じて恐る恐る目を開けると、そこには、紅色の汽車が煙を吐き出してとまっていた。

振り返るとそこには「9と4分の3番線」と書かれたプレートが下がっている。

とりあえずホツと息をつく。

アリスは汽車のいちばん後ろの車両の中に空いているコンパートメントを見つけた。

荷物を全部入れ腰掛ける。

一息ついてアリスの隣りで、羽に頭を突っ込んで眠っている鳥籠の中のオリオンをちゃんちゃん、とつついた。

アリスは窓の外のホームを眺める。

あちこちでたくさんの家族が別れを惜しんでいる。

そこには笑顔があり、少し涙もあった。

そんな些細な光景が、アリスはたまらなくうらやましかった。

そんなことは、微塵も表情に出さなかったが。

結局アリスのいるコンパートメントにはその後誰も来なかった。

そして、汽車が汽笛をあげてゆっくりと動き出す。

たくさんの生徒が、窓から身を乗り出して最後の別れのあいさつを、家族にしている。

アリスは外の景色が見えないように廊下側に体を引いた。

しばらくすると窓の外はこぎれいな田園風景に変わっていった。

呪文学の教科書をボーツと流し読みしていると、ふいにコンパートメントが開いて真新しそうなホグワーツの制服に身を包んだ影が入ってきた。

「アリス！」

赤毛の女の子がギュツとアリスに抱きついてきた。

「リリー？」

その女の子は、ダイアゴン横町で出会ったマグル生まれの少女、リリー・エンバスだった。

リリーはアーモンド形の緑の目を嬉しそうに細めた。

「また会えて嬉しいわ、アリス！」

「私もよ、リリー」

再会を喜ぶふたりに、オリオンが頭をもたげて眠たそうな目を向けた。

昼になると、ふっくらとした笑顔のおばさんがたくさん色とりどりのお菓子をカートに乗せてコンパートメントの扉を開けた。

アリスとリリーはそれぞれお菓子を少しずつ買って、仲良く分け合って食べた。

アリスは、ひるがお園で少しの昼ご飯をみんなで分け合ったことを思い出してしまった。

昼が過ぎて、アリスは体を丸めて眠り、リリーは読書をしていた。

そんな静かな空間に、またもやコンパートメントの扉が開いた。3度目だ。

リリーはちよつと本から目を上げて扉を見て、アリスは椅子からずり落ちた。

そこには、黒いクシャクシャな髪でメガネをかけた男の子と、見覚えのある綺麗な黒髪と灰色の目の男の子が立っていた。

「やあ、ここ空いてるかい？」

メガネの男の子が人懐っこそうに笑った。

その隣りにいる男の子は、むつつりとコンパートメントの中を見回した。

アリスは寝ぼけなまこの目で、ふたりを見上げる。

その銀色の目と灰色の目があった。

その時

。

十数年に渡るアリスの運命の恋が、静かに幕を開けた。

第5話 運命の出会い シリウス編 (前書き)

ホグワーツ特急でのアリスとシリウス達との出会いの、シリウス目線です。

第5話 運命の出会い シリウス編

魔法界の名家、ブラック家の長男シリウス・ブラックは新学期が来るのを何より心待ちにしていた。

ホグワーツという学校に早く入学したいという気持ちもあったが、何より1日でも早くこの家から抜け出したかったのだ。

シリウスの両親は純血であることを誇り、マグル生まれを「穢れた血」と呼んで蔑んでいた。

シリウスは、そんな家と両親を心の底から軽蔑している。

シリウス自身も純血だったが、シリウスはそれには興味がなくむしろ疎ましく思っていた。

そして9月1日の新学期

。

暗く陰気な家を出てロンドンの朝の光を体いっぱい浴びた時は、

解放されたという思いで胸が震えた。

由緒ある魔法一家に育ったシリウスは、キングズ・クロス駅の9と4分の3番線の場所も難なく分かった。

しかし、そこには先客がいた。

背中まで伸びる綺麗な黒髪をリボンでまとめた女の子が壁を前にしてうんうん唸っている。

自分とあまり背が変わらないから、たぶん新入生だろう。小柄な体を少し変わった服が包んでいる。

（マグル出身の奴か？）

声をかけようかと悩んでいると、後ろを体の大きなマグルが横切りシリウスは女の子に激突してしまった。

「……」

女の子は声にならない叫び声を上げる。

振り返った女の子の目には涙が浮かんでいたが
吸い込まれそうな銀色だった。

その色は、

自分のにごったような灰色とは違う、綺麗な銀色。

その目に見つめられてシリウスは息が出来ないような気分になる。

つい口調が荒くなってしまった。

「お前何やってんだ、早くどけ」

「なっ……」

女の子にこれ以上見続けられるのがいたたまれなくなり、シリウスはその横を通り過ぎて壁を通り抜けてしまった。

「悪いことしちゃったな……」

間もなく女の子も壁を通り抜けてくるだろう。

シリウスはさっさとコンパートメントを探しにその場を離れる。

その途中でまたもや誰かがぶつかってきた。

衝撃はさっきよりも強い。今度は更に被害をこうむる相手はいなかったが。

「ああ、ごめん。ちょっとよそ見をされていてね。」

全然反省してないだろう、と言いたくなるような軽い謝罪だ。

ぶつかってきた相手は、わざとそうしたかのようなクシャクシャな黒髪で、メガネをかけた少年だった。

今日は黒髪の奴によく会う。

そういえば自分も黒髪だ。

「君、新入生？ 僕もなんだ。僕はジェームズ・ポッター、よろしく。君の名前は？」

「俺は…シリウス…シリウス・ブラックだ」

苗字の部分になると、口調が苦々しくなる。

「ふーん。よろしくね、シリウス」

ブラックって、あの純血のブラック家かい？

普段自分の名前を名乗る時は必ずそういうセリフが返ってくる。

だがこの掴み所のない少年は、ただニコニコ笑って「早くコンパイトメント探しに行こう、なくなっちゃうよ」とシリウスを引っ張る。

シリウスを長年の友達のように扱うジェームズ。

だが意外とその馴れ馴れしさに不快感はなかった。

「お前が話しかけなきゃ今頃コンピュータメントに座っていたはずなんだが」

「細かいことは気にしない気にしない！」

「お前言ってることが矛盾してるぞ」

得体のしれない奴 それがシリウスがこの少年に対して
感じた第1印象だった。

コンピュータメントは意外とすぐに空いている場所が見つかった。

そこではらく過ごしていたが、ふいにジェームズが立ち上がった。

「シリウス…僕は寂しいんだ」

「はあ？」

いきなりのジェームズの奇怪なセリフに本を顔にのっけていたシリウスは変な声を上げる。

「せっかくこれから薔薇色のホグワーツの生活がスタートするって言うのに、その始まりがコンパートメントに男と2人つきりなんて寂しすぎるじゃないか!!」

「……………」

「新しいコンパートメントを探しに行こう!」
出会い

「お前って見た目に似合わず女好きなのか？」

結局シリウスはジェームズに付き添い廊下をひたすら歩いている。

「やだなシリウス、誤解を招くような言い方はやめてよ。僕は別に男の子だっていいんだ。ただ周りにたくさん人がいてほしいんだよ」

「一緒にいると面倒臭い性格だな」

「そんなんだと君、これから7年間友達出来ないよ」

そんな会話をしているうちに最後の車両まで来てしまった。

「結局どうしたいんだ。引き返すか？」

その声をかけるシリウスの横で、ジェームズが突然1つのコンパートメントを凝視し始めた。

「な…なんだ？」

「ここだよ…ここで運命の出会いが僕を呼んでいる！」

「はあ？」

本日2回目のシリウスのふぬけた声だ。

シリウスを無視してジェームズはコンパートメントを開けた。

「やあ、ここ空いてるかい？」

ジェームズが中に入り、シリウスも渋々後に続く。

中には、女の子が2人いた。

ひとり肩まで流れる濃い赤毛の、空間が華やぐような美人だ。

もうひとりは

。

9と4分の3番線の入り口で出会った、銀色の目……。

シリウスは、今度もまた息が出来なくなるような、胸がいつぱいな気持ちになった。

女の子は、寝ぼけているようで、その銀色の目を眠たそうにこする。

よく見ると女の子はとても整った顔立ちをしていた。

そのことに気付き顔が赤くなる。

まだ何も知らないこの少女、アリス・ソノイが

その後シリウスにとってかけがえのない存在になることを、彼はまだ気付いていなかった。

第5話 運命の出会い シリウス編 (後書き)

感想、指摘お待ちしております！

第6章 魔法の城へ(前書き)

約半月ぶりの投稿ですね…。

しばらくもうひとつの連載「銀魂 Lonely rainy day」に集中していましたので。ごめんなさい。

銀魂を知っている方なら是非ご覧になって見て下さい。

CMはこれくらいにして、本編をどうぞ！

第6章 魔法の城へ

「やあ、ここ開いてるかい？」

その軽い調子の言葉と共にコンパートメントに入ってきたふたりの少年は、寝ぼけなまこだったアリスにはおぼろげに見えた。

「ええ、構わないけど…アリスもいいわよね？」

「え、うん…」

ぼんやりと答えると、向かい側に座っていたリリーはアリスの隣りに移動して、目の前の席が埋まった。

…と思った瞬間、隣りでガシツという何かを掴む音がした。

「ん？」

振り向くと、メガネをかけたほうの男の子がリリーの手を握りキラキラした目でその少女を見つめていた。

「君…なんて美しいんだっ！ 名前は？ 僕はジェームズ・ポッター。よろしく！！」

ジェームズ以外の3人は一斉に目をフクロウのようにパチクリさせた。

「え、り、リリー・エンバスよ…」

「百合リリー！！ なんて美しい名前なんだ！」

美しいを連発するジェームズ。

リリーは呆気にとられていたが、我に返りジェームズの手を払いのけた。

「ちょっと、あなた近いわよ。離れてちょうだい」

明らかにリリーのジェームズに対する第1印象は最悪だ。

あからさまに嫌がるリリーだがジェームズはこれっぽっちも気にしてないようだ。

ジェームズから目を離すと、もうひとりの少年と目が合った。

「……………」

「……………」

何か引つかかる。

「……………あー！」

アリスの突然の大声にリリーとジェームズは振り向いた。

少年も目を見開いてアリスを凝視した。

「あなた、さっきの意地悪少年！」

「「はあ？」」

ジェームズとリリーの声が被った。

「9と4分の3番線に入る時にものすごく意地悪したのよ！ 思いだした！」

「今さらかよー！」

今さらということは、この少年はアリスのことに気付いていたのだらう。

「まあまあ、どういふことがよく分からないけど、ふたりは知り合
いだったの？」

ジェームズが仲裁に入ったが、

「違うわ！」

とアリスはそっぽを向いてしまった。

「状況が飲み込めないんだけど…そちらの人は？」

リリーが控えめに聞いた。

アリスの態度にイライラしている少年に代わってジェームズが答え
た。

「彼はシリウス・ブラックだよ。君の名前は？」

「私はアリス・ソノイです」

アリスが言うと、ジェームズはにっこり笑った。

「アリス？ 可愛い名前だね。アリスって呼んでいい？ 僕のこと
はジェームズでいいよ」

ペラペラ話すジェームズに言葉を挟む余裕もない。

相変わらずニコニコしているジェームズに向かって、アリスは2度頷いた。

リリーはジェームズを警戒し、アリスとシリウスはお互いに口をきかない険悪な雰囲気の中でジェームズだけがずっと空気を読まずにしゃべり続けた。

それはだんだん空が水色から紅に、さらに漆黒に移り変わっていくまで続いた。

そして、とうとうホグワーツに到着した。

つく直前に着替えておいたホグワーツの制服は、初めて着たのに長い間着ていたかのように馴染んだ。

ホームに出ると、数え切れないくらいたくさんの生徒たちで溢れかえっていた。

はぐれないようにアリスとリリーは手をつないでいた。

どきくさにまぎれてジェームズがリリーの空いているほうの手を握ろうとしていたが、リリーのアップパーカットによって断念しているようだった。

ホームに、地底まで届くような大声が響き渡った。

「イツチ年生はこつち！ イツチ年生はこつちに来いー！」

反応して声が聞こえた方向を見ると、ひとつだけ人の群れから飛び出た頭がぎよるぎよると周りを見回していた。

「ほえー、おつきい！」

思わず変な声が出たほどだ。ゆうに2mはあるかと思われる大男だ。とりあえずその男の方向へ向かって人波をかき分けた。

その男の間近まで行くと、男が振り返ってリリーと一緒にアリスはぎよっとした。

「おー、お前さんがダンブルドア先生様が言ってた日本人の留学生か！」

「え、は、はい…」

「俺は、ルビウス・ハグリッドだ。ハグリッドと呼んでくれ」

ハグリッドはそう言うといつの間にか周りに集まってい一年生全体に呼びかけた。

「よし、イッチ年生はボートで行くから俺についてこい」

そう言っ大股でのっしのっしと歩いていく。

アリスたちは小走りで後を追いかけた。

しばらく歩くと、大きな湖に出た。

「わあ…！」

一斉に歓声があがった。

湖の向こうには、空まで巨大なホグワーツ城がそびえたっていた。

大小さまざまな塔が立ち並び、明かりでキラキラとオレンジ色に輝く窓が星空に映えていた。

湖には、ボートがたくさん浮かんでいる。

「4人ずつで1艘のボートに乗れ！」

アリスとリリーがボートに乗ると、シリウスとジエームズも続いた。

「みんな乗ったな？ では進めえ！」

ボートがするすると水面を滑りだした。

暗闇に浮かびあがるホグワーツが
ついていた。

すぐそこまで、迫

第6章 魔法の城へ（後書き）

内容がないですね…。

あんまり進んでません。組分けのところは1章分で済ませたいと思います！

第7章 運命の分かれ道

アリスたちはホグワーツの入り口でハグリッドからマクゴナガル先生という女の先生へ引き渡され、全校生徒が集まる大広間へ連れて行かれた。

大広間は天井があるはずの場所に、どこまでも飛んでいってしまい
そうな外と同じ星空が広がっていた。

「今からみなさんがホグワーツで7年間過ごす寮を決めます。名前を呼ばれたら前に出てくるように」

グリフィンドール

レイブンクロ

ハッフルパフ

スリザリン

その4つの寮があると汽車の中でジェームズに聞かされていた。

緊張が極度に高まる。

1列に並んだアリスたちの前の方に、古びた帽子が椅子の上に置いてあった。

「ブラック・シリウス！」

シリウスの名前が呼ばれた。

アリスの2つ後ろに並んでいたシリウスが列を離れ、アリスの横を通り過ぎていくのを感じた。

シリウスが椅子に座り、その黒い頭に大きな帽子が乗せられた。

一瞬の沈黙

。

「グリフィンドール！！」

水を打ったようにシンとしていた大広間が、急にざわめきに包まれた。

シリウスは無表情でグリフィンドールのテーブルについた。

「ゴホン！」

マクゴナガル先生が咳払いをしていくらか大広間は落ち着きを取り戻した。

だが多くの視線は今だシリウスに向けられている。

何が何だか分からないアリスにジェームズが呟いた。

「シリウスの家は代々スリザリンの家系でね。グリフィンドールとスリザリンは対極だからね。みんな不思議に思ってるんだ。ブラック家の長男がグリフィンドールになるなんてさ」

「そうなの……」

グリフィンドールとスリザリンの関係や家系のことなどよく分からなかったが、家柄のせいで自分の人生を決められるなんて、アリスだったら絶対に嫌だ。

「エンバス・リリー！」

「行ってくるわね」

リリーも震える声でそう言って前へ進んでいった。

帽子はリリーの頭に触れた瞬間叫んだ。

「グリフィンドール!!」

グリフィンドールのテーブルから歓声が上がった。

リリーは微笑んで席に着く。

「リリーもグリフィンドールか。いい生活になりそうだね」

「ジエームズもグリフィンドールがいいの？」

「ああ、僕の家はずっとグリフィンドールだしね。勇猛果敢なグリフィンドール! ってとこかな」

こそこそしゃべっていると、マクゴナガル先生に恐い目で睨まれ、大人しく前を向いた。

いつの間にか組分けはだいぶ進み、もう「P」まで来ていた。

「ポッター・ジエームズ!」

「じゃあ、グリフィンドールで会おう」

ジェームズもグリフィンドールに選ばれた。

ここに来て、アリスは不安になってきた。

親しくなったりリーもジェームズも（気に食わないが一応）シリウスもグリフィンドールになった。

人見知りをする自分が他の寮になって、新しい友達をつくる自信はない。

でも、自分は勇気があるとはあんまり思えなかった。

『やーい、妖怪！』

アリスは頭を振って嫌な考えを追い払った。

ここまで来てあんな人たちのことを思い出す必要はない。

自分を、信じるしかない。

そして

。

「ソノイ・アリス！」

感覚がない足で、帽子のところまで歩いていった。

マクゴナガル先生に帽子をかぶせられる。

目の前がすっぽりと暗闇に包まれる。

「ふーむ……君は、……！！」

帽子が急に息をのんだ。

帽子の驚いた雰囲気伝わってくる。

「君は、まさか

『ムーン・ヴィーナス月の女神』かね？」

「え？」

ムーン・ヴィーナス
月の女神？

初めて聞く言葉だった。

「そうだ。間違いない……血筋でいえばスリザリンに入れるべきなの
だろう」

アリスは心臓をぎゅっと見えない手で掴まれたように苦しくなった。

「だが、君には
ている」

彼の、あの日本人の子の血が流れ

あの日本人って、ホグワーツ初めての日本人留学生だった子のこと？

「ならば……君は勇気を勝ちとるべきだ。」

グリフィンドール……」

第7章 運命の分かれ道（後書き）

「月の女神」はこの物語での結構重要なキーワードです！

第8章 新しい生活

「グリフィンドール!!!」

そう帽子が叫んだ直後、耳をつんざくような歓声が響き渡った。

アリスはまだ信じられないような気持ちで立ち上がってアリスを迎えるグリフィンドール生のほうへ向かった。

選んでもらえた。みんなのいる、グリフィンドールに！

「アリス、一緒の寮になれて嬉しいわ！」

リリーに抱きつかれジェームズに背中を叩かれ、アリスはぼーっと夢見心地だった。

アリスはリリーの隣りに座った。向かい側ジェームズがいる。

「でもまさかとは思ってたけどシリウスもグリフィンドールとはね」

「俺だって信じられねえよ」

ジェームズの右隣りにはシリウスが頼杖をついていた。

皮肉めいた口調だったが、嬉しさを隠しきれないようだった。

こうした会話をしているうちに、組分けは終わったようだった。

「新入生のみんな、入学おめでとう」

教員席の真ん中に座っていた人物が立ち上がった。

長い白髪を腰のベルトに挟み、濃紺のゆったりしたローブを着て、星を含んだようなキラキラしたブルーの目でアリスたちを見下ろしている。

アリスをここに連れて来てくれた
アルバス・ダンブル
ドアだ。

アリスと目が合うと、ちよこつとウィンクしてくれた。

「さあ、食前前に言葉は無用じゃ。よく食べるといい」

次の瞬間、テーブルに用意されていたたくさんの空っぽのお皿に、溢れんばかりの料理が盛られていた。

「!？」

アリスは思わずのけ反る。

隣りでリリーも息をのむのが雰囲気で分かった。

「これ…食べていいの？」

向かい側に目をやると早くもジエームズは皿にポークやステーキなどを山盛りにしながら頷き、シリウスもチキンにかぶりついていた。

「いいみたいね」

リリーとクスツと笑いあってパンに手を伸ばした。

初めて見るようなごちそうをお腹いっぱい食べて、アリスは幸せな気分だった。

いつの間にか辿り着いていたグリフィンホール塔に入ると、またもや歓声があがった。

そこは赤を基調としたカーテンやクッションがたくさんある広い部屋で、蝋燭と暖炉の灯りが部屋を幻想的に魅せている。

アリスとリリーのふたり部屋だった。

そして、案内された自分たちの寝室の窓からは三日月が見え、アリスは一瞬でこの塔が気に入った。

すでに届いていた荷物からパジャマを取り出して着替えると、ふたりはすぐにベッドに入る。

ふたりの少女は、しばらくおしゃべりをしていたがすぐに眠りの世界へと旅立った。

「おはよう、アリス」

「おはよう…リリー」

アリスはベッドから出た今でも眠たそうに頭がグラグラしている。
着替えも遅くてリリーに手伝ってもらったくらいだ。

「アリスって低血圧なの？」

アリスの髪をとかしながらリリーが聞いた。

もうすっかりお姉さんのようにアリスの世話を焼いている。

「うっん…」

そんなことはなかった。

ひるがお園で暮らしてた頃は起きるのは先生の次に早かったくらいなのだ。

「とにかく朝食に行きましょう」

女子寮を出ると、ちょうど男子寮から出てきたジェームズ達と鉢合わせした。

「やあ、おはよう。リリー君は今日もバラのように美しいよっ!」
ジエームズの挨拶を華麗にスルーしたリリーは、ジエームズとシリ
ウスの後ろにいる男の子ふたりに目を留めた。

「ポッター、その人たちは？」

「ん？ ああ、僕たちと同室になったリーマス・ルーピンとピータ
ー・ペクデユリユーだよ」

顔色の悪そうな男の子と、背の低いぼっちゃりとした男の子がアリ
スたちに目を向けた。

「リーマス・ルーピンです。よろしく」

「ピ、ピーター・ペクデユリユーです…」

リリーは「リリー・エンバスよ」と答えていたが、寝ぼけなまこの
アリスはフラフラとしてろくに聞いていなかった。

「ちょっと、アリス…大丈夫？」

「うん…アリス・ソノイです…よろしく」

リーマスはちよつと笑つて、ピーターはオロオロと焦っていた。

「さあ、自己紹介はそのくらいにして、下に行こう！」

ジエームズの声にアリスたちは大人数でグリフィンホール塔を出た。

大広間へ向かおうと動き始めると、後ろでゴンツという音がした。

みんな一斉に振り向くと、しんがりだったアリスが壁におもいつきりおでこをぶつけていた。

「うづう…」

真っ赤に腫れたタンコブが出来ている。

「もう、アリスったら…」

みんな笑った。

シリウスは呆れたようにため息をつく。

仲間に囲まれて

新しい生活が始まる。

第8章 新しい生活（後書き）

なんだか主要キャラなのにシリウスが影ですね。

次回からは頑張ります！

第9章 アリスは天才？（前書き）

1カ月以上更新できなくてすみませんでした！

パソコンが9月前半壊れていた上になんとか手が遠のいてしまっ
て…。

こっちの小説は銀魂のほうの合間にちよこつと…という感じなので、
1カ月に1度更新出来ればいいかな、と思っています。

第9章 アリスは天才？

晴れて魔法の世界で暮らすこととなったアリス。

入学したホグワーツ魔法魔術学校は、今までのアリスが過ごしてきた生活とは全てがかかけはなれていた。

初めての夜は満腹感と疲労による睡魔によって充分に見ていなかったが、その校内は数歩歩くたびに目を見張る光景が次々と沸き起る。

アリスと同じでこの間始めて魔法に触れ合ったりリーもホグワーツにまだ慣れていないようだったが、アリスほど驚いてはいない。

「アリス、そんなにいちいち止まっていたら授業に遅れるよ」

ジェームズがまたもや立ち止まったアリスを引っ張りながら言う。

もう十数回目だ。

しかし、それほどまでにホグワーツはすごいのだ。

廊下のいたるところには動く肖像画があり、アリスたちに話しかけてきたり、壁や床、あるいは天井から半透明のゴーストが出てきたり、動く階段があったり。

そうこうしているうちに、初めての授業である変身術の教室についた。

アリスのせいで遅刻ギリギリだったので、後ろの席しか空いていなかった。

2列に並んで座ると同時に、マクゴナガル先生が入ってきた。

生徒たちをその鋭い双眸で睨むように見回す。

空気が緊張でピンと張り詰める中で、ジェームズとシリウスだけは平然と騒いでいる。

といてもけだるそうに机に肘をつけるシリウスにジェームズが話しかけているだけなのだが。

マクゴナガル先生の視線がジェームズとシリウスにとまり、さらに険しくなった後お説教という名の長い演説が始まった。

「みなさん入学したばかりで浮かれている人もいるでしょうし、緊張している人もいるでしょう。多少なら構いません。ですがこの場を乱すほど極端な人は即刻出ていってもらいます。変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中でも最も難しいもののひとつです。生半可な気持ちで私の授業を受けてもらいたくはありませんね」

長い言葉のあとにジェームズとシリウスを睨みつける。

さすがのふたりもマクゴナガル先生の視線にさらされ少し縮みあがる。

ふたりとほとんど同じ位置にいるアリスももともと小さい体を更に縮こませた。

その後長いノートをとり、マッチを銀色の針に変える練習を始めた。

ジェームズとシリウスは配られたマッチを数回目で銀色に輝く鋭い針に変えてしまった。

リリー、リーマスは苦戦しながらもなんとかマッチの半分ほどを針に変えられたようだ。

ピーターはまったく上手くいかないらしい。

アリスはマッチに意識を集中して軽く杖を振ってみた。

そうすると自分でも驚いたことにそこにあったはずのマッチは銀色

の針に姿を変えていた。

周りでおおーっとどよめきが起こる。

「ミス・ソノダお見事です！ グリフィンドールに5点差し上げましょう」

「アリス、一発で変身させるなんてすごいわ！」

授業が終わり教室を出てすぐ、リリーが感心したように言った。

「アリスは魔法が得意なの？」

話しかけてきたリーマスにアリスは首をかしげる。

「分からない…魔法を使うのってほとんど初めてだったし」

「じゃあアリスは天才なのかも…」

ひとりだけ初っ端からおいていかれたピーターが青くなってぼそつと呟いた。

「そんな風には見えねえけどな…」

低い声で言ったシリウスの腰をアリスは思いっきり蹴った。

「今日は簡単な風邪を治す水薬をつくりましょう」

魔法薬学の最初の授業。

始まって5分程経った頃。

教室の中ほどから悲鳴がいくつかあがった。

「ア、アリス！ 一体鍋に何を入れたの!？」

「わ、私にも分からないわ!」

リリーの叫び声にアリスも焦って返す。

どうやらアリスの大鍋からもくもくとした黒い煙が上がっているようだ。

「どうやらアリスは天才というわけではないみたいだね……」

ジェームズという言葉にみんながいつせいにコクコクと頷いた。

第9章 アリスは天才？（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0285v/>

月の女神と純潔の杖

2011年11月16日16時54分発行